（様式１）　実践事例

学校名	大玉村立大玉中学校	校長名	渡辺　康弘		
住　所	安達郡大玉村玉井字的場９３	児童生徒数	２４４名	学級数	１１
ＴＥＬ	0243-48-3300	ホームページアドレス	http://www.ohtama.gr.fks.ed.jp/		

生徒主体の授業を展開し、確かな学力の向上を目指した授業実践

１　少人数指導の計画等

（１）生徒一人一人にきめ細かな指導ができる少人数学級の利点を生かし、学力向上の土台となる望ましい学級・学習集団づくりを推進する。

（２）幼・小・中連接の組織である「おおたま学園」の事業との連携や授業研究を通して、教員の意識改革・指導力向上を図る。

２　実践の概要

（１）定期・不定期の教育相談の機会を増やすなど、よりきめ細かな生徒指導の充実を図り、学習・生活両面にわたる悩み・不適応の解消に努めた。各学年の教師団が、特に配慮を要する生徒に対して、常にスモールステップで目標をもたせ承認・奨励・称賛する等、チームで計画的にかかわったため、生徒は安心感をもち学校生活を送ることができるようになった。

（２）「おおたま学園」学力向上委員会（授業改善検証チーム・学習習慣検証チーム）、心に響く道徳の授業実践委員会の研究授業の実践、アドバイザーによる指導助言、校内授業研究会を通して、人権に配慮した指導、特に「人権教育フィルター」を活用した授業実践による教員の意識改革を推進した。その結果、各教科等の授業で、できるだけ多くの生徒の発言を取り上げたり、一つの生徒の考えを全員で共有・吟味したりする場面が少しずつ増えてきた。また、生徒の自己肯定感が徐々に高まってきた。

（３）３年生を対象に補充学習の時間を、毎日昼休み・放課後に設定し、一人一人のつまずきを把握し指導することで不得意教科の克服に取り組んでいる。生徒たちは、意欲的に取り組み、達成感を味わうようになってきた。

（４）数学の授業では、目的を明確にしたグループ活動を取り入れ、教師が各グループでの学習状況を見取り、全体で共有させたい考えを取り上げ、吟味するようにしたので、生徒は他の生徒の発言を注意して聞くようになり、発言する生徒も徐々に増えてきた。

＜おおたま学園研究授業「道徳」＞

＜校内研究授業「数学」＞

３　実践の成果と課題

○　生徒同士や生徒と教師のかかわりが多くなり、各教科等の授業、昼休み・放課後等における補充指導や教育相談などを通して、生徒理解が深まり、互いの信頼関係もさらに深まった。

○　「おおたま学園」の幼・小・中が連携した活動や授業研究会の実践により、教師の意識改革が進むとともに、指導方法の工夫について協議する機会が増え、指導力の向上につながった。

○　各教科等で目的をもったグループ活動を意図的に行い、教師が生徒の発言をつないだり、発問を吟味したすることにより話合いが充実し、生徒は互いの話を聴く態度が身に付いてきた。

●　今後、地域が主体となったきめ細かな教育を目指した「おおたま学園」コミニュティ・スクール、学校支援地域本部等との連携をより深め、生徒のさらなる思考力・判断力・表現力の育成を目指し、研究を深めたい。